

Title	ビルドゥング概念の変遷とガダマー： 「実践哲学の復権」の潮流の光のもとで
Sub Title	Die Wandlungsprozesse des Bildungsbegriffs und Gadamer : Im Licht einer sogenannten "Rehabilitierung der praktischen Philosophie"
Author	森, 祐亮(Mori, Yusuke)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.136 (2016. 3) ,p.69- 98
JaLC DOI	
Abstract	Dieser Aufsatz behandelt zwei Aspekte. Einerseits möchte ich mich in diesem Aufsatz mit dem Begriff „Bildung“ im weiteren Sinn auseinandersetzen, andererseits mit der philosophischen Hermeneutik von Hans-Georg Gadamer und ihrer Bedeutung für die Bildung. Das Ziel dieses Aufsatzes ist, mithilfe eines Überblicks über die Entstehungs- und Entwicklungsgeschichte des Bildungsbegriffes und durch Analyse von Gadammers philosophischer Hermeneutik zu zeigen, dass der Bildungsbegriff, der heute in Pädagogik bzw. Erziehungswissenschaft allgemein gebraucht wird, ungerechtfertigt verkürzt wurde. In der Pädagogik bzw. der Erziehungswissenschaft wird der Bildungsbegriff auch heute noch als Grundbegriff gesehen. Mir scheint aber, dass der Bildungsbegriff der Pädagogik die Vielschichtigkeit des allgemeinen Bildungsbegriffs, die sich dem gebotenen Überblick der Begriffsgeschichte entnehmen lässt, übersieht. Dies stand unter dem Zeichen des Bedeutungsgewinns der Natur- und der empirischen Wissenschaften. „Pädagogik“ hat sich als „Erziehungswissenschaft“ zu begründen versucht, und in diesem Prozesse der Bildungsbegriff verkürzt. Diese Bemühungen waren zwar nicht fruchtlos, erfolgten aber auf Kosten der Vielschichtigkeit des Bildungsbegriff. Gadamer war zwar nicht Pädagoge, aber ein Philosoph, der über Bildung reflektierte. Seine „philosophische Hermeneutik“ und die Betrachtungen zur Bildung übersahen nicht das wichtigste Moment der Bildung, das der Pädagogik heute fehlt : die Universalität. Keine geringere ist die Bedeutung, sich in der Pädagogik mit Gadamer zu

	beschäftigen.
Notes	特集：教育学 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000136-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビルドゥング概念の変遷とガダマー

——「実践哲学の復権」の潮流の光のもとで——

森 祐 亮*

Die Wandlungsprozesse des Bildungsbegriffs und Gadamer

—Im Licht einer sogenannten

“Rehabilitierung der praktischen Philosophie”—

Yusuke Mori

Dieser Aufsatz behandelt zwei Aspekte. Einerseits möchte ich mich in diesem Aufsatz mit dem Begriff „Bildung“ im weiteren Sinn auseinandersetzen, andererseits mit der philosophischen Hermeneutik von Hans-Georg Gadamer und ihrer Bedeutung für die Bildung. Das Ziel dieses Aufsatzes ist, mithilfe eines Überblicks über die Entstehungs- und Entwicklungsgeschichte des Bildungsbegriffes und durch Analyse von Gadammers philosophischer Hermeneutik zu zeigen, dass der Bildungsbegriff, der heute in Pädagogik bzw. Erziehungswissenschaft allgemein gebraucht wird, ungerechtfertigt verkürzt wurde.

In der Pädagogik bzw. der Erziehungswissenschaft wird der Bildungsbegriff auch heute noch als Grundbegriff gesehen. Mir scheint aber, dass der Bildungsbegriff der Pädagogik die Vielschichtigkeit des allgemeinen Bildungsbegriffs, die sich dem gebotenen Überblick der Begriffsgeschichte entnehmen lässt, übersieht. Dies stand unter dem Zeichen des Bedeutungsgewinns der Natur- und der empirischen Wissenschaften. „Pädagogik“ hat sich als „Erziehungswissenschaft“ zu begründen versucht, und in diesem Prozesse der Bildungsbegriff verkürzt. Diese Bemühungen waren zwar nicht fruchtlos, erfolgten aber auf Kosten der Vielschichtigkeit des Bildungsbegriff.

Gadamer war zwar nicht Pädagoge, aber ein Philosoph, der über Bildung reflektierte. Seine „philosophische Hermeneutik“ und die Betrachtungen zur Bildung übersahen nicht das wichtigste Moment der Bildung, das der Pädagogik heute fehlt: die Universalität. Keine geringere ist die Bedeutung, sich in der Pädagogik mit Gadamer zu beschäftigen.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程 2 年

0 はじめに

本研究の目的は、大きく言って二つに分けられる。一方はガダマー (Hans-Georg Gadamer, 1900-2002) の提唱するいわゆる「哲学的解釈学」の礎となっているビルドゥング (Bildung) の概念を内在的に、そして当時の (つまり 1960 年代から 70 年代にかけての) ドイツのアカデミズムにおけるビルドゥングについて流布していた思潮と照らし合わせつつ明らかにすることである。そして後者は当然前者と関わっているのであるが、このガダマーの意図するビルドゥングを通じて今日教育学においてなお基礎概念と見なされているビルドゥングの見方に対して一つの示唆を与えることである。本研究はガダマーのビルドゥング概念を主題とする以上、ガダマーの占める位置は小さいものではない。しかしその一方で、本研究の眼目は純粋哲学の圏域として認識論の問題や存在論の問題を扱うことに置かれているのではない。本研究の目的は、ガダマーを通じてビルドゥング概念の持つ「広がり」を呈示し、その上で今日流布する教育学におけるビルドゥングについての言説ではその有効性を十分に捉えきれないことを示すことにある。それゆえ、ガダマーの思想そのものに入り込んで行く前に、ビルドゥングという概念の現代に到るまでの歴史的変遷について、ごく簡単にではあっても敷衍しておく必要があるだろう。従って本研究の辿る道筋は以下になる。まず第一章では現代に到るまでのビルドゥング概念の変遷を簡単に俯瞰する。その上で、第二章においてはガダマーの名著『真理と方法』が出版された 1960 年代から 70 年代にかけてのドイツのアカデミズムにおけるビルドゥングを巡る言説を追う。これは、ガダマーのとりわけ『真理と方法』において語られている精神諸科学の基盤としてのビルドゥングが、現実との連関を欠いた空虚な概念などではなく、むしろ現実の大学における精神諸科学の地位の危機を乗り越える意図を持っているものであるということを示すためである。その際、当時のドイツアカデミズムに流布していた潮流の一つとして「実践哲学の復権」に着目する。

そして最後に、ガダマーの用いるビルドゥング概念の内実と意味を明らかにすることを目指す。流れとしては、広い意味でのビルドゥング概念についての視点を呈示し、そこからガダマーのビルドゥング概念に収斂させていくという方向を取る。先取りするというならば、本研究において示したいのは、ビルドゥング概念の本質的契機である「普遍性」が今日の教育学の視点においては欠けているのではないかということ、そしてその対抗言説としてガダマーの「哲学的解釈学」において基盤となっているビルドゥング概念が機能し得るのではないか、ということである。

1 ビルドゥング概念の歴史の変遷と今日の教育学におけるビルドゥング

1-1 ビルドゥング概念の起源と定着の過程

「ビルドゥング」という概念を前にしてわれわれが最初にぶつかるのは、日本語に翻訳する際にこの概念はいかなる言葉で置き換えられるべきなのか、という問題である¹⁾。しかし本研究においてこの問題には差し当たり立ち入ることはしない。これは、一つの言葉に置き換えてこの概念の内包する意味を矮小化しないためである。それゆえ、本研究においては片仮名表記の「ビルドゥング」を用いることにする。

しかしそのような日本語への翻訳の困難ということを度外視したとしても、この言葉の内実は極めて錯綜している。概念史研究の基本書といってよいであろうヨアヒム・リッター等が編纂した『歴史哲学事典』、ならびにオットー・ブルンナーやラインハルト・コゼレック等の手による8巻から成る事典、『歴史の基礎概念』のビルドゥングの項目をそれぞれ繙くと²⁾、双方の事典の性格の持つ差異にも関わらず、まず目に付くのはビルドゥング概念についての記述の仕方の一致である。両者とも、この概念を1800年前後に「定着した概念」と定義付けた上で、同じモーゼス・メンデルスゾーンの「ビルドゥングという概念はわれわれの言葉の新参者で

あり、もっぱら書物の言葉である」という言葉を引用している³⁾。このメンデルスゾーンという言葉は1784年のものであるが、しかしビルドゥングという言葉自体はこの時代の新しい造語というわけではない。ビルドゥングの源泉は「人文主義ないし教育学の意味領域にではなく、神秘主義的神学ないし自然哲学的思弁の意味領域にある」⁴⁾とされる。ビルドゥングという言葉には、その語形が示す通り Bild=像という言葉が内包されており、これが指すのはまさしく神の像に他ならない。神の像に向けて自らを形成するという、形而上学的ではあっても主体性と結びつく側面を持つ一方、神によって形成されるべき姿を与えられ、神によって形成されるという受動的な側面もビルドゥングという概念には含まれていた⁵⁾。ビルドゥングはこのような前史を持ちつつ、メンデルスゾーンの生きた時代の啓蒙的な思潮のなかでその主体的な側面に光が当てられたと考えることができる。つまり、形而上学的・神秘主義的な含意を持つこの概念は、「啓蒙」や「教育」と並んで人間の主体性を確立するための鍵概念として時代のなかで再解釈されることとなったのである。

このビルドゥングの概念はしかしメンデルスゾーンのいう「書物の言葉」に留まらず、この時代を特徴付ける巨大な概念へと瞬く間に成長する。ガダマーは主著『真理と方法』においてこの概念の重要性を端的に表している。

当時支配的な妥当性を獲得するまでに到ったビルドゥングの概念こそが18世紀の最も偉大な思想である。そしてまさにこの概念こそが、認識論的に正当化することはできなくとも、19世紀の精神諸科学が生きる要素を特徴付けるもののなのである⁶⁾。

メンデルスゾーン、あるいはカント達に続く思想家達によってビルドゥングの概念は刷新されたといえる。リヒテンシュタインによれば、カント

もまたビルドゥングという言葉は勿論知っていたがしかし「啓蒙主義用語の意味においてしか用いなかった」⁷⁾。つまり、カント等の時代においてはビルドゥングの概念は「教育」という概念とほとんど同義の意味において捉えられていた⁸⁾。それゆえ、ビルドゥングの刷新の役割を担うのは、カントに続く世代、いわゆるドイツ観念論の論客達ということになる。リヒテンシュタインは「ドイツ観念論において初めて、ビルドゥングの概念は主体性、そして精神の現実の問題と結びついた」⁹⁾としている。つまり、ビルドゥングは彼の言説に従えば、フィヒテやヘーゲルを通じて、現在考えられるような「精神の形成」という刻印を受け取ったということになる。ここでリヒテンシュタインはフィヒテのビルドゥング概念を、自然的目的論に則って考えられていたとされるヘルダーやゲーテの考えるビルドゥングと対比しつつ、精神の運動原理とする。つまり、ビルドゥングはここで、神によってないし自然によって与えられたものの運動から、人間の「精神」の運動へと移行する、とされる。メンデルスゾーンやカント達において萌してはいたものの、しかし自覚的な仕方では展開されることのなかったビルドゥング論が、フィヒテ並びにヘーゲルを通じて一つの形を取るようになる。ここで彼らのいうビルドゥングは、いわゆる「教育」でもないし、あるいは個々人の「成長」といったものに解消されるようなものでもなく、そういった意味で「人間形成」や「陶冶」、ましてや「教養」という言葉で言い尽くすことのできるものではない。まさしくビルドゥングとしてしか言い表すことのできない精神の運動である。ビルドゥングという概念は歴史性に強く刻印を負った概念であり、特にフィヒテのものに関しては当時のドイツの政治的状況を反映しているとフィアハウスは指摘する¹⁰⁾。つまりここでのビルドゥングは真の「国民」を形成するという意味での教育への要求と密接に関わっている。しかし、その一方でビルドゥングは「国民」の教育と矛盾するものでもなければ、それに従属するものでもない。リヒテンシュタインはフィヒテが初めてビルドゥングを知

に、つまりは自然ではなく精神の領域において根拠付けたとするが、これはそれまでビルドゥングの持っていた神秘主義的・自然的目的論的な意味合いを刷新するものであった¹¹⁾。いわば「精神の形成」としてのビルドゥングがここで初めてはっきりと定式化されたわけである。この「精神の形成」は先の政治的状況と矛盾するものではないが、無関係なものでもない、むしろそのような時代に要請された「国民的教育」の根幹を為すのがビルドゥングなのである。ガダマーはヘーゲルのビルドゥング概念に言及しつつ次のように述べている。

自らを普遍的な精神の本質にすることが、人間のビルドゥングの普遍的な本質である。局所性に耽る者、たとえば節度も理解もなく盲目的な怒りに身を任せる者はビルドゥングを欠いている。ヘーゲルが示したのは、そのような人間には根本的に抽象能力が欠けているということである。そのような人間は自分自身に距離を取って物事を見ることができず、(…)彼自身の個性性を規定する普遍を見ることができないのである¹²⁾。

ビルドゥングの概念はこのように、神秘主義的・自然哲学的な源泉を持ちながら、啓蒙主義的思潮のなかでその主体的な側面が強調され、ドイツ観念論によって自然的目的論の色が落とされた形で「精神の形成」という極めて巨大な概念となった。これは、単に個々人の成長ないし人間形成や、あるいは一国民のための、一国家のための教育といった枠に留まるものではない。それが意味するのは、「普遍性」に向けたビルドゥングである。ガダマーがこの時代のビルドゥングについて「人間のビルドゥングという理想」¹³⁾という言い方をする際、意図されているのはまさしくこのような普遍性なのである。

先取的にいうならば、今日の教育学の思考図式において欠けていると筆者に思われるのはまさしくこの「普遍性」という契機である。そのよう

な普遍性を欠いたビルドゥングに対するアンチテーゼとして、「現代」に属しながらも同時に普遍性を掲げるガダマーの「哲学的解釈学」は有効に機能する可能性を持っている。

1-2 今日の教育学におけるビルドゥング概念

ビルドゥングという概念の内実、そしてその錯綜している様が1-1で簡単にではあれ俯瞰できたでしょう。本節においてはそのビルドゥング概念の教育学における現在の位置づけを探って行きたい。ビルドゥングの概念は指摘を待つまでもなく教育においてまた教育学において中心的な概念であったし、またこれからそうであろう。しかし、どのような意味でのビルドゥングが現在の教育学の中心的な概念であるのか、そのことは論者の立場によって異なった様相を見せ、また当然上で描いたようないわゆる「普遍性」を掲げるビルドゥングとは大幅に異なった装いを見せることになる。まずビルドゥングを取り扱った教育学におけるハンドブックを例にとってみよう。

このビルドゥングの理解は三様に特徴付ける事ができる。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに倣って、次のことを出発点とすることができる。すなわち、あらゆるビルドゥングの理解は（…）次のような関係を表しているということである。その関係とは、第一に人間と自己の関係であり、第二に人間と彼が共に暮らす他者との関係であり、第三には彼と世界の総体との関係である。このそれぞれに人間は入り込むかあるいはすでに入り込んでいる¹⁴⁾。

つまり、ビルドゥングを構成するのは主体としての人間である自己と自己の関係、その自己と自己でない他者との関係、自己と人間ではない存在である他者＝世界との関係という三契機だ、ということである。この契機を経由しての変容が現代の教育学におけるビルドゥングの説明である、と理

解してよいだろう。

しかし、この記述はビルドゥングの前史を顧みると、ビルドゥング概念を過剰に矮小化しているという印象を受ける。ここでは、ビルドゥング史における最大の思想家の一人といってよいであろうフンボルトの名こそ挙げられてはいるものの、その思想の内実に触れられることはない。このような語り方は、先に挙げたビルドゥングの本質を為すとされた「普遍性」という契機が欠けてしまうのではないだろうかという疑念を呼び起こす。しかしその一方で、ビルドゥングをいわば「簡略化した形で」描こうとする立場の人びともまた、論拠を持っている。そして、それはとりわけ近年隆盛である実証的な方向性に定位しようとする教育学の動向と関わっている。

その動向を顕著に表している、またその後の教育学の方向性に影響を与えた論文として、まず挙げられるのがハインツ＝エルマー・テーノルトの1997年の論文、「ビルドゥング—その教育科学における主題化の形式と意味」であろう¹⁵⁾。ここでテーノルトはまさにビルドゥングを教育学（ここでテーノルトの指す「教育科学」も含め）の基礎概念と認めた上で、従来の教育学研究の在り方を根本的に批判する。テーノルトの批判は主に事柄の記述という「科学的」言説を超えて規範を打ち出そうとする点に向けられている。テーノルトはまず従来の教育学研究の在り方を三区分してそれぞれ批判している。彼の批判の対象の三類型はそれぞれ1. 古典解釈の保存と積義 2. 歴史哲学的、世界観的、ユートピア的なビルドゥング概念の使用 3. 言語化できないものの場を占めるものとしてのビルドゥング概念となっている¹⁶⁾。そしてそれぞれに対して彼がどのような批判をするかということでそれぞれの表題に「あるいは (oder)」という形で「積義の無駄なあがき」「特権的な知への逃走」「ビルドゥングを語るに当たった議論の矛盾」という副題が付されている。そして筆者の見方によればこの三類型はそれぞれ繋がりを持っている¹⁷⁾。第一の類型は「真のビルドゥング」を求めてそれぞれ古典的著作に当たる。しかしそのような

研究に従事する者はもっぱら内在的解釈に耽るため、ある種の排他性を帯びる。それゆえ、たとえばテーノルトの例に従うならばロマン主義研究とマルクス研究の間には有意義なコミュニケーションが生まれない。また、ここでテーノルトが「解釈 (Auslegung, Interpretation)」ではなく「釈義 (Exegese)」という言い方をしているのは意味のないことではない。つまり、このような研究スタイルを取る人々は、ヘーゲルやフンボルト、あるいはロマン主義の叙述家や、マルクスといったような古典的な大家の書いたテキストのなかに必ず「正しい」ことが書いてあると信じ込み、いわばそのテキストを聖書の如く読むからである。第二の類型は第一のものと連なるものである。その類型は社会科学の一部の基礎概念であることを超えたビルドゥングの在り方を示そうとする。このタイプの研究は、テーノルト曰く「人間の可能性と将来のために有効な像を未だなお示し得ると考えている」¹⁸⁾ のであるが、それゆえ歴史哲学、世界観やユートピアに対して投げかけられた批判がそのまま当てはまる思考図式であるとされる。そしてこの点は第三の類型と直結する。鳥光の指摘にもあるように¹⁹⁾、この立場がテーノルトにとって最も問題のあるものなのではあるが、これは前二つの類型なしには成り立たないように思われる。ある古典的思想家の作品を聖書の如く読み、そこから妥当な人間の可能性と将来像を描こうとすること、このことがテーノルトの述べる「語り得ぬもの」へとビルドゥングを導く土壤を形成している。

この語り得ぬものとは何か。それは学問的ないし科学的に定義することのできない概念と言い換えることができる。当該論文の少し下った箇所ではテーノルトは次のように述べている。

問題が生ずるのは、ビルドゥングの理論家が知を構造化し、立てられた問題を解明するのに飽き足らず、世界を解釈し、規範を打ち立て、自律した批判を根拠付けようと試みる際になのである²⁰⁾。

テーノルトの考察はビルドゥングのなかに、またビルドゥングを語る研究者の意識のなかに潜む「当為性への要求」を学問的な言説としては不当なものとして告発することに向かう。確かに、1-1 で見てきたように、ビルドゥングという概念は単なる記述概念に留まるものではなかった。彼の批判の矛先はまさしくこの点に鋭く突き立てられる。

しかし、テーノルトもまたビルドゥングの概念そのものを放棄しているわけではない。むしろ、彼もまた自身が根拠を与えようとしている「教育科学」の基礎概念としてビルドゥングを用いている。しかし、そのためには一般に流布している（ないしテーノルトの時代においてはまだ主流であった）ビルドゥングの概念は、経験科学としての教育科学を打ち立てようと目論むテーノルトの目にはあまりに非科学的なものと映ったのである。それゆえ、その概念に科学的な妥当性を与える作業が彼にとって必要だったのである。そして、鳥光の指摘に従うならば、この作業はテーノルトの「経験的研究」と「古典的研究」の接続という問題に関わるものである²¹⁾。そのような作業の結果を受け継いで定式化されたのが上で見たような自己-自己関係、自己-他者関係、そして自己-世界関係という三竦みのビルドゥングの構造だったのである。

この経験的な研究と思想的な研究との接続はいかなる形で行なわれるのか。そのことを顕著な形で示しているものの一つが、近年邦訳も刊行されたローター・ヴィガーらによるバイオグラフィ的ビルドゥング研究であろう²²⁾。この研究はインタビューを行い、その上で古典的な思想を参照項とする、という手法を取っている。そしてこの著書のなかでヴィガーはヘーゲルの思想を参照項として選択している²³⁾。もっとも、この手法を用いる人々が依拠するのは、ヘーゲルのみに限られるわけではない²⁴⁾。

経験的研究と古典的研究を教育学（ないし教育科学）において接続させようというこのような研究の意図は評価されてしかるべきものであるし、またテーノルトや彼に賛同する立場を取る鳥光のいう「思想研究の実証嫌

い」という主張は傾注に値するものではある。それでもなお、疑問は払拭されぬままである。たとえば、そこで選択されるのがなぜヘーゲル、あるいはフンボルトなのかという疑問である。思想を参照項とし、経験的実証的研究と照らし合わせを行い、なおかつその研究が学問的ないし科学的であると称するならば、そのことに根拠を持って答える準備がなければならない。さらに、筆者がより大きな危惧を抱くのはこの点なのであるが、そのような研究において古典的大家の思想そのものが稀薄なものにされてしまうのではないか、ということである。確かに、教育学（ないし教育科学）は哲学とは異なり純粋な思想研究ではない。しかし、それは教育学研究が思想研究をなおざりにしてよいということを意味するのでは決してない。教育学には、その基礎概念たるビルドゥングの概念について徹底した考察を行なうという役割もある。すでにテーノルト等に遥かに先立つ1960年代、ヴォルフガング・ブレツィンカは教育学の学問的性格について、哲学者ハインリッヒ・ロムバッハと論争を行なっている²⁵⁾。ブレツィンカは経験科学としての教育科学の重要性を強調した論客ではあるが、その一方で「教育についての哲学」の可能性を完全に放棄しているわけではない。ブレツィンカはロムバッハとの論争のなかで、世界観のような概念を持ち込む類いの教育学を擁護しようとする彼の態度を厳しく批判しつつも、同時に自らの基礎付けようとしているのが教育科学という学問であって、それ以外の教育学の可能性を否定するものではないということをはっきりと述べている。

私が「教育の哲学」を正当なものと思なしているばかりか、必要不可欠なものと思っていることは、(…)明らかである。(…)現実の科学(Realwissenschaft)に役立ち、また個別科学が根本的に携わることのできない哲学的な問題提起、解決の試み、解釈の着想というものが考えられる²⁶⁾。

筆者の考えは、このブレッツィンカのいう「教育の哲学」にあたる部分がまさしくビルドゥングの概念の思想的研究である、というものである。すでに見てきたように、ビルドゥングの概念には膨大な前史、そして錯綜した変遷の過程が認められる。それを一義的に分析可能な形で定義する試みは、無駄ではないにしてもいずれにせよ暫定的なものに留まらざるを得ない。それゆえ、自己と自己、自己と他者、自己と世界の三項関係という定式化は確かにビルドゥング概念を表す重要な契機ではあっても、ビルドゥング概念はそれに尽きるものではない。

このビルドゥングの錯綜した様を、歴史家ラインハルト・コゼレックは端的に表している。少し長くなるが、本稿にとって大変有益な示唆であるように思われるので引用しておこう。

大雑把に言って、ビルドゥングの概念史は三段階に分けることができる。つまり神学が支配的な段階、啓蒙的・教育的段階、そして主に自己反省によって規定される近代の段階である。そのような見方が見落としているのはしかし、第二の啓蒙の段階にも第一の神学の段階が含まれており、そして近代のビルドゥング概念にもまた双方の先立つ段階が入り込んでいる、ということである。それぞれの以前の語法に入っていく、長期に渡って意味を持つ、通時的な概念史の推力というものがある²⁷⁾。

これに従えば、ビルドゥングの概念は区分が可能であるがそれにも関わらずそれぞれの区分は浸透し合っており、そして同時に歴史に回収されることのない「通時的な」要素も持っている。そしてコゼレックに従えばわれわれの生きる時代は「自己反省によって規定される」ビルドゥングの時代ということになる。

われわれの時代において、「教育科学」の基礎概念という分析的な仕方とは違う仕方で、いかにビルドゥングの概念について語ることができるの

だろうか。そのことを考えるに当たって、ガダマーの「哲学的解釈学」に依拠することは無益ではなかろう。ガダマーは主著『真理と方法』においてビルドゥングの問題を論じているが、彼のビルドゥングの思想は直接にビルドゥングの問題を論じていない箇所にもまで通底していると筆者は考える。このことは後に3章で論じる。ガダマーの語るビルドゥングは単なる分析概念に還元され得ぬものであり、またその持つ「伝統」の重みを見過ごしていない。しかし、それにも増して指摘しておくべきであるのは、ガダマーのビルドゥング概念が当時の学問の性格を巡る議論と無関係ではないということである。これは次章で詳しく見る点であるが、主著『真理と方法』の出版された1960年代の前後の時期においては、まさにビルドゥングを巡る言説が当時の哲学という学問の学問性格に関わるものとして盛んに取り上げられていた。そして、当時の『真理と方法』の刊行後、この著書が一つのトリガーとなっていると筆者は考えるのであるが²⁸⁾、いわゆる「実践哲学の復権」というものがドイツアカデミズムの主流の一つとなって行った。当時のビルドゥングの言説もこの潮流と密接に関わっているというのが筆者の見解であるが、もしこれが正しいとすれば、ここで語られるビルドゥングの概念は今日の教育学において盛んに取り上げられる仕方とは全く異質な次元を持っていることになる。というのもそれは現代の「経験的」教育学があえて批判的に距離を取っている規範の概念と大きく関わることになるからである。以下ではその「実践哲学の復権」の潮流を概観し、その上でそのビルドゥングとの関係を示すことを目指す。

2 実践哲学の復権とビルドゥング—1960-70年代にかけてのビルドゥング—

2-1 実践哲学の復権

「実践哲学の復権」という潮流の動向は、その名を冠したマンフレット・リーデルの手による監修の、2冊合わせて1000頁を超える論文集に

まとめられている²⁹⁾。この全てを洗い出すことは、紙面の関係でも、また筆者の知識と力量の関係から言っても不可能である。だが、その膨大な紙面とそれに参加した論者の数、そして当時のアカデミック世界を代表するその論客達の名前を見るだけでも、当時のこの動向に対する関心の高さと多様性は伺われる。しかし、この動向に対する関心の大きさ、多様さが、この動向を一つにまとめあげることの困難をすでに為している。なぜなら、この「実践哲学」という主題をこそ論者達は共有しているものの、彼らがそこに接近するための思想的基盤は大きく異なっているからである。

それにも関わらず、次のことは断言することができる。すなわち、当時のこの「実践哲学の復権」の潮流は、自らの思想の長所のアピールの場として利用されて持ち上げられたものでもなければ、単なる古典古代への回帰、先ほどのテーノルトの言い方を借りれば「正典」としての古典に回帰することを意味しているのでもない。そうでなく、これはまさに当時の時局に対する一つのアカデミックの生きた反応だったのである。

この点について、哲學家マルティナ・ブリューマッハーの言に耳を傾けてみよう。

実践哲学に再び命を与えることが意味していたのは（…）社会的な実践の同時代の問題に対する意識的な向き合いである。問われていたのは、自然破壊や核戦争による人類の危機の可能性を考え抜くはずの行為の倫理的尺度であり、産業発達の目的といったような非常に根本的な行為目的を放棄することは不可欠なのかどうか、ということである³⁰⁾。

ここでブリューマッハーが例示しているのは、国家や革命の正当性や、それに対する抵抗の正当性といった相当程度具体的な問題から、徳と快の関係といったような倫理学に伝統的な、抽象度の高い問いに到るまで幅広

い³¹⁾。そのような問いが立てられるということは裏を返せば、指針ないし尺度が欠けていたこと、そしてそのことに対して哲学研究や教育学研究に従事する者でなくとも不安を覚えていたということである。上で引用したコゼレックの言に従えば、神学が支配的な時代でもなく、「進歩」という概念に刻印を負ったのでもない、「反省」を必要とする時代が到来したのである。だが、そのような時代にあっても、あるいはそのような時代にあつてこそ、行為の尺度という実践哲学的な鍵概念への反省が必要不可欠となってくるのである。しかもこれはプリューマッハーの引用に見事に表されているように、現代特有の問題を帯びているのである。つまりプリューマッハーが例として出している自然破壊や核戦争、これらは進歩という概念に刻印付けられた啓蒙の時代から考えると、まさしく技術や産業の発達をもたらした契機に他ならない。それゆえ、これらを止めるためには、「産業発達」という目標を放棄すべきなのかという問いすら生ずるのである。これは、発展を絶対指標として掲げる啓蒙主義の時代には有り得ないことである。このように見ると、先のコゼレックの引用が正鵠を射ていることがわかる。自然破壊や核戦争と産業発達の例は、どれほど啓蒙の段階が現代の段階に入り込んでいるかを典型的な形で示してくれている。

このような状況に対して、哲学は応答することを迫られた。上で述べられていた自然破壊や核戦争といった世界規模の概念に加え、プリューマッハーは、墮胎や安楽死、民主主義や正義といったような生活世界に身近に感じられる例を挙げ、その上でそれらについての公共的な議論に「専門的な哲学者の立場というものが欠けている」ことが嘆かれているとした³²⁾。つまり、あらゆる角度、あらゆる次元から「実践」の問題が問われ、その上で哲学にその答えが求められることとなったのである。このような外的事情と哲学内部の運動としての「実践哲学の復権」の動きは間違いなく無関係ではない。

しかし、外部からの要請に応じ、いわば「否応なく」哲学が実践の問題

に向かったのかということ、それも間違いである。哲学内部の運動として、この時期に哲学が実践という主題に向かったことには内的必然性が伴っている。

プリューマッハーが指摘したような哲学外の、いわば生活世界に根ざした問題状況にのみならず、その運動を動かすこの内的必然性についても触れなければならぬ。先に挙げたリーデルの手による『実践哲学の復権』という膨大な論文集は、確かに内容が非常に多岐に渡っており、その動向を一つにまとめあげるのは極めて困難である。だが、それに対してこの論文集の巻頭を飾るヘルムート・ファーレンバッハの論文はこの運動を俯瞰的に眺めようとする貴重な試みである。まず彼の言に耳を傾けてみよう。

ファーレンバッハはまず、哲学において「実践」という主題が切迫したものととして迫って来たことは、プリューマッハーの指摘するように生活世界の差し迫った要求に端を発するものであるということを端的に認めた上で、次のように続ける。

そのことと対応しているのは、哲学の側からすると、その認識関心は人間存在の自己了解や行為の方向付けを目指しているのであるが、その認識関心から実践との結びつきや時代との結びつきが取り除かれてしまったら哲学のあり、いやひょっとしたら決定的な意味の可能性が失われてしまう、ということである。(…)その点で、哲学が社会批判的な、将来を方向付ける実践に対して重要性を欠いているということに鑑みて 疑問符を付けられるということとは原理的に単なる「外部からの」攻撃ではない³³⁾。

哲学は、伝統的にただ抽象度の極めて高い問いにのみ耽溺してきたのではない。それは実践との関係を常に持っており、そのことはファーレンバッハの言に従えば哲学という学問の本質を形成する極めて重要かつ積極的な契機である。その契機そのものが問われるということ、それは哲学の存在

意義そのものを揺るがしかねないものである、というのがファーレンバッハの上の引用から見て取ることのできる考えであろう。

この「哲学と実践の関係の危機」とビルドゥングの問題が結びつく、というのも哲学、さらには哲学を基盤としたいいわゆる精神諸科学にとってビルドゥングという概念の占める重要さは自明のものであったからである。より正確に述べるならば、「かつては」自明のものであったと言った方が正しいかもしれない。というのも、自然諸科学の隆盛と近代技術の進歩に基づく現代社会において、哲学ないし精神諸科学によるビルドゥングという概念は苦境に立たされることとなったからである。それゆえ、この時代に「実践哲学の復権」という思潮が出現した事は、ビルドゥングの問題と密接に関わっているのである。この思潮は裏を返していうならば、哲学や精神諸科学はビルドゥングに対して適切な指針を与えることはできなくなったのではないかという疑念と連動している。以下ではこの両者の関係を見て行く。

2-2 実践哲学の復権とビルドゥング

「実践哲学の復権」の潮流が生じて来た時期と前後して、従来のビルドゥング概念に対して疑惑の目が向けられる事態が生じていた。より正確に述べると、哲学並びに精神諸科学が主導的役割を担うビルドゥングが疑問視され、批判にさらされるようになった。つまり、いわゆる古典的なテクストや古典語に依拠するビルドゥングに対する批判が生じたのである³⁴⁾。このタイプのビルドゥングは言うまでもなく、普遍性を志向する傾向を持ったビルドゥング概念であり、さらにコゼツレクの区分に従うならば第二の啓蒙的な段階に深く根ざしている。それゆえ、この類のビルドゥングはドイツ観念論ならびに新人文主義の後継を為す、いわば「人文主義的な」ビルドゥングである。これを、後に見るようにガダマーは擁護しようとしたのである。

これに対峙するのは自然諸科学と近代技術の隆盛、そしてそれに対応することのできるビルドゥングである。「一般的ビルドゥングは、職業と結びついたビルドゥング、技能に関するビルドゥングと分けられ」³⁵⁾ 哲学と精神諸科学には前者が、自然諸科学には後者が充てがわれるようになる。そして、前者は軽んじられ、場合によっては不当なまでに貶められる、という事態が生ずる。ここでまたプリュームマッハーの指摘に耳を傾けよう。

歴史における人間の精神の歴史的・哲学的、芸術的そして政治的・人倫的な実現をその内容とする、純粋に精神科学的なビルドゥングという構想、それはもはや「近代の生活」を克服するには不十分であるように思われた。そのようなビルドゥングの構想は、もはや科学的・技術的な文明化という特殊な問題と要求を反省することはできないのではないか、という非難が生じた³⁶⁾。

高度に技術が発展し、それを駆動させる役割を担う自然諸科学が猛威を振るう社会においては、もはや歴史に立返り、古典を研究しそのことによって将来に対して適切な人間像を描き出そうとする、そのような精神諸科学に基づくビルドゥングの概念は不適切である、あるいは無用の長物である。ビルドゥングはそのような曖昧模糊としたものではなく、特定の職業、特定の技術をものにすることに向かわなければならない。そのような批判がわき起こったのである。つまりこの立場にしてみれば、伝統的なビルドゥング概念はいわば「特権的な知への逃走」「伝統への無批判な耽溺」と映ったのである。このような傾向は上述のテーノルトの批判においても見られたものであった。

このような批判に対して、精神諸科学を擁護する哲学の立場から当然反論が為されないはずもない。ヨアヒム・リッターはそのような背景で「精神諸科学の課題」と題した論文で次のように論じている。

19世紀は、自然諸科学の時代であるだけでなく、同等の正当性を持って精神諸科学の時代であるとも言われる。このことは、同じ社会が学問を科学化の進む過程での実践の実体と基盤へと学問を進めた一方、他方では人間の歴史的かつ精神的な世界との関係において「理論」という課題を引き受け、実践を目指すのではなくまた実践に要請される目的からも根拠付けることのできない、ビルドゥングの基盤となる精神諸科学の地位（Klasse）を生み出したのだということを含んでいる³⁷⁾。

ここでリッターのいう「実践」と、「実践哲学の復権」が意味するような実践、つまり価値規範にかかわるような実践との間には意味のずれがある。というのも、もし同じ意味で捉えたとするならば、リッターの考えによるとビルドゥングは価値や規範を含む実践と関わるものではない、ということになるからである³⁸⁾。いずれにせよ、このような仕方ではいゆる「精神諸科学擁護者」の立場からは依然としてそのビルドゥングとの連関が強調されていた。

ガダマーの主著『真理と方法』はこのような時代背景のもとで登場した。もちろん、『真理と方法』の公刊はリーデルの『実践哲学の復権』第1巻の公刊に12年先立っているものであるので、これに影響を受けたわけではない。しかし、ガダマー、そして彼の主著『真理と方法』はむしろゲートシュカー等の指摘するように、この運動の火付け役としての役割を担う存在であった³⁹⁾。このような実践とビルドゥングに対する問題意識を抜きにしては、彼の『真理と方法』におけるビルドゥングの節、そしてそれを直接に論じていない箇所でも通底しているビルドゥングへの志向性を理解することはできない。

3 ガダマーの「哲学的解釈学」とビルドゥング

3.1 『真理と方法』におけるビルドゥング―精神諸科学の基盤として―

すでに指摘したように、ガダマーは主著『真理と方法』の序論を除いた最初の節でビルドゥングについての考察を行なっている。『真理と方法』は確かにビルドゥングを主題的に扱ったものでもなければ、教育の問題について正面から論じた著作でもない。それが問題とするのは、自然諸科学の「方法」では捉えきれない類いの「真理」である、ということはずでに本書の冒頭で強調されている通りである⁴⁰⁾。本研究においては『真理と方法』の細かな内実に立ち入ることはしない。しかし、強調しておきたいのはガダマーが『真理と方法』において自然諸科学では捉えきることのできない、自然諸科学によっては「制御することのできない」⁴¹⁾真理領域を問題としたということである。その際ガダマーが強調するのが「理解」という現象である。「理解」は付随的な現象ではなく、有限的な存在者である人間の本質を為すものであるとガダマーは考えた。彼の「哲学的解釈学」はこの「理解」という現象を徹底的に考察する学のことと解してよいだろう。ガダマーはこのような思考図式を取った上で、主著『真理と方法』においてビルドゥングの概念を冒頭に置いたのである。

まずは『真理と方法』におけるガダマーのビルドゥング概念を追って行くことから始めよう。彼もまた、本稿の取った行程と同じく、ビルドゥング概念の歴史を簡潔に素描している。その際、ガダマーはビルドゥング概念に神秘主義的な根があることを指摘し、その上で19世紀に決定的な転換が起こったことを指摘しており、ヘルダー、フンボルト、ヘーゲルを重要人物として特に名指しで言及している⁴²⁾。この点については本稿において指摘してきたことと比べ特異な点は見受けられないので特に立ち入ることはしない。ここで重要なのはガダマーがビルドゥングについて、それが「生成」から「結果」へと意味がずれてきていること、ビルドゥングがビルドゥングの外側に目的を持つものではないことを強調し、またビル

ドゥングの持つ「保持」という点に力点を置いていることである。『真理と方法』の叙述に目を向けてみよう。

(…) というのもビルドゥングの結果は (…) 内的な形成及びビルドゥングという過程のなかで生ずるのであり、従って常に更なるビルドゥングのなかに留まっているからである。ビルドゥングは自然と同じく、自らのうちにある目標以外を知らない。(…) その点でビルドゥングは単なる予め与えられた素質の育成を超えている⁴³⁾。

ここで述べられていることは、ビルドゥングという概念の本質に関わるもののように思われる。ビルドゥングは何かの手段などではない。目的のための手段は、その目的が達せられた段階で無用のものとなる。それに対して「ビルドゥングにおいて獲得されたあらゆるものは失われることなく、保持される」⁴⁴⁾。裏を返せば、ビルドゥングは以前に獲得されたものを前提としており、そのことが精神諸科学の本質を為すものである、とガダマーは主張する。

ガダマーはそこから、ヘーゲルに依拠しつつビルドゥングの運動を直接的な所与性から普遍性へと向かう運動として描き出すことを試みる。人間は、ガダマーがヘーゲルに依拠しつついうところによると、単に自然的な存在者でないという点にその本質的特徴を負っており、それゆえビルドゥングこそが人間に課された普遍的な使命だとされる。まず、自己の視点を離れ、自己に与えられた所与性を超えて普遍的なものを希求する運動としてのビルドゥングがガダマーによってここで定式化される。その際自らの持つ所与性を離れるトリガーとしての役割を果たすものとして古典を参照することをヘーゲルは要求するが、ガダマーもそれを正当なものとして認める⁴⁵⁾。

しかし、ガダマーがビルドゥングにおいて重要視するのはこの過程にお

ける「疎外」という契機以上に、その疎外からの回帰という契機である。ヘーゲルの例をとってガダマーは、人間のビルドゥングは自己からの疎外を必要不可欠なものとしていること、そしてそれは特に古典作品を介して「典型的な」形で行なわれることを示した。それに続くガダマーの言説を見てみよう。

その点で、あらゆる理論的なビルドゥングは、見知らぬ言語や見知らぬ言語をわがものにするだけでさえも、遙か昔より始まっているビルドゥングの過程の単なる継続なのである。自然的なものから精神的なもののうちへと高まっていくあらゆる個々人は、自身が属する民族の言語、習俗、制度のなかに（…）自らが自分のものとせねばならない所与の実体を見出すのである⁴⁶⁾。

ガダマーはここでヘーゲルのビルドゥング思想を下敷きとしつつ、それを自らの関心である「精神諸科学における真理」の問題に見事な形で取り込んでいる。彼はこのビルドゥングの構造を精神諸科学の基盤に据える。つまり、精神諸科学の知はいわゆる白紙の状態から認識を練り上げるといふ静態的構造ではなく、すでに何らかの形成を経た状態から練り上げ、またそのなかでそれを認識する主体も変容を蒙るという力動的構造を持っている。それゆえ、ガダマーが精神諸科学の基盤として求めるのはこのダイナミズムへと開かれた態度である。

どれほど正確に伝承を観察し、徹底的に研究したとしても、芸術作品や過去という異質なものを受け入れる準備がなければ、それは何にもならない。このことはまさに、われわれがヘーゲルに従いビルドゥングの普遍的特徴として強調してきたことである。つまりそのように他者に、普遍的な視座に開かれたままであるということである⁴⁷⁾。

ここにすでに、ガダマー独自の「哲学的解釈学」の重要な契機が表されている。ビルドゥングという概念が主題的に論じられているのは500頁近い大著『真理と方法』において10頁ほどではあるが、それにも関わらずその重要性は決して見過ごせないものがある。以下では彼のビルドゥング概念をさらに掘り下げて行くために、「哲学的解釈学」の重要概念である「解釈的経験 (hermeneutische Erfahrung)」を取り上げ、それがまさしくビルドゥングの過程であることを明らかにする。その上で、それがどのような意義を同時代の思潮において持ち得たのかということを考察したい。

3-2 「解釈的経験」としてのビルドゥング—その射程—

「解釈的経験」について、ガダマーはそれが自らの思想において最も重要な契機であると述べている⁴⁸⁾。本節においてはまず、この「解釈的経験」がビルドゥングの過程であることを明らかにすることを目指す。

それに先立って、ガダマーの哲学的において「経験」という概念がいかなる形で捉えていたのかを見る必要がある。まずはガダマー自身の言説に目を向けてみよう。

経験というものが、それが新たな経験によって反駁されない限りで妥当性を持つということは、明らかに経験の本質の性格を言い表しており、それは当該の経験で問題となっているのが近代的な意味での学問の遂行であれ、ずっと以前から為されているような日常生活の経験であれ同じ事である⁴⁹⁾。

ここでいわれているのは極めて一般的な意味で解することができる。「経験」ということで言い表されているのは「何かについて知ること」であり、それはその知見に対する新しい見方が提出されない限り妥当性を持つ。

しかし、ガダマーが経験の本質として見るのは、この経験が「否定され得ること」、すなわちその否定性である。経験は絶えずわれわれに出会わ

れる新たな地平によって否定され、更新される可能性を持っている。言い換えれば、現在の経験において「妥当」と考えられているものは次の瞬間においてその妥当性を失う可能性を常に内包しているということである。

この（経験の）過程はいわば本質的に否定的なものである。経験の過程は単に類型となる一般性の断絶なき形成過程と記述されてはならない。この形成はむしろ、誤った一般化が経験によって反駁され、類型的と考えられていたものがいわば脱類型化されることによって起こるのである⁵⁰⁾。

この「否定性」は、しかし経験の消極的な規定として捉えられてはならない。というのも、従来正しいと考えられていた視座が新たな視座によって否定されることによって、その視座は更新され、新たな視座へと開かれるからである。その意味において「経験の否定性は本質的に生産的な意味を持っている」⁵¹⁾。この「開かれること」、ガダマーの言葉を使うなら「開放性（Offenheit）」が、経験にとって本質的かつ極めて積極的な契機である。それは経験の絶対的否定、普遍の無効化を意味するのではない。むしろ、この「否定性」によって視座が「開放」されることが経験の普遍性への道を切り開いてくれる。それゆえ、物事をわかっている、経験があるといわれるひとは、単に多くの経験を経て多くの知を有しているひとを指すのではなく、多くの経験に対して開かれているひとのことを指す。

経験があると呼ばれるひとは、経験によってそのようなひとになったというだけではない。そのようなひとは経験に対して開かれてもいる。（…）経験の弁証法が完成するのは、閉じられた知のなかではなく、経験に対する開放性においてであるが、その経験に対する開放性は経験それ自体によって解き放たれるのである⁵²⁾。

経験の完成は、経験の蓄積にあるのではなく、新たな経験に対して開かれているということにある。このことは、ガダマーが彼の「哲学的解釈学」において絶えず強調する「有限性」という契機と結びついている。経験とは「人間の有限性の経験なのである」⁵³⁾。

以上のことから、「解釈的经验」とは否定性を媒介としながら人間が自らの有限性を自覚し、それによって新たな経験へと開かれて行く過程であると定式化することができるだろう。そしてこのことが3-1で描いたビルドゥングの過程と結びついていることは容易に見て取ることができるだろう。従って、ガダマーのビルドゥング概念とは否定性という契機によって自らの有限性を自覚しつつ、不断に普遍性を希求する運動＝解釈的经验であると考えることができる。この運動の根底にあるのは、ガダマーがハイデガーに倣って定式化した「現存在そのものの在り方」⁵⁴⁾である「理解」であることは言うまでもないであろう。このように考えると解釈的经验は、まさに「理解」によって支えられるビルドゥングの過程に他ならない。

ガダマーのこの「解釈的经验」としてのビルドゥングがいかなる意味を持っているのか、そのことは第二章において論じた実践との関係を顧みるとより際立って理解可能になる。加藤がその著書において指摘しているように、ガダマーの「解釈的经验」における「開放性」の概念は当為や規範への要求を含み込んでいる⁵⁵⁾。確かに、「開放性」は言い換えれば他者に対する「寛容」として解することも決して困難ではないだろう。しかし、ガダマーの「解釈的经验」としてのビルドゥングが、ただ「自らの有限性の自覚」にのみならず「普遍性への希求」に刻印を負っていることを考えると、このことが意味するのはそれ以上のことである。すなわち、解釈的经验としてのビルドゥングはただ一般性 (Allgemeinheit) の解体にのみ向かうのではない。解釈的经验は同時にそれを打ち立てることに向かう。それはまさしく、解釈的经验としてのビルドゥングが普遍性 (Universalität) へと方向付けられているからに他ならない。解釈的经验としてのビルドゥ

ングは、既存の一般性を出発点としながら場合によってはその限界を暴きつつ、絶えず普遍性に方向付けられながら新たな一般性を打ち立てようとするのである。

4 おわりに

最後に、ガダマーの解釈的経験としてのビルドゥングの構想を当時の文脈に照らし合わせ、今日の教育学におけるビルドゥング概念の言説においていかなる可能性を有するかを見てみよう。まず、『真理と方法』の出版された1960年代においては二章で述べたように、精神諸科学的なビルドゥングの不可能性が語られる事態が生じていた。それに対してガダマーが自らのビルドゥング概念に背負わせる「普遍性」という極めて重厚な概念はそのような潮流に対する反論であったといえるかもしれない。「普遍性」を掲げる以上、ビルドゥングは「自ら他に」目的を知らず、職業や技術の手段には堕することはない。

さらに、今日の教育学においても「普遍性」という概念が忘れ去られてしまったという批判が可能であろう。ビルドゥングが普遍性によって刻印を負っていること、このことがコゼレックの言葉を借りるならばビルドゥングという概念の持つ「通時的な推力」なのではないだろうか。裏を返せば、この「普遍性」という側面を見落としてしまうと、彼がビルドゥングの本質を構成する契機として捉える「歴史性」「言語性」を切り捨てることになってしまうのではないだろうか⁵⁶⁾。ビルドゥングの歴史の過程を顧み、今日の教育学におけるビルドゥング概念を見たとき、ガダマーの「解釈的経験」としてのビルドゥングはそのような批判として有効に機能するはずである。

※ガダマーからの引用は10巻からなる著作集（Gesammelte Werke Bde. 1-10, Tübingen, 1986-1995）を用い、GWと略記した上で巻数と頁数を付

した（例 GW1, S. 15.）。また著作集版に収められていないものについては略記を行わずそのまま記した。

註

¹⁾ 山名淳はこの問題に精力的に取り組んでいる。しかし、山名のこの研究から明らかになるのは、このビルドゥングという概念が極めて錯綜した形で日本に輸入され、様々な解釈を施されているという事実、そしてそれゆえこのビルドゥングという概念を一つの言葉で定義することの（ほとんど不可能といってよい）難しさであるように思われる。Vgl. 山名淳「『陶冶と人間形成』—ビルドゥング (Bildung) をめぐる教育学的な意味世界の構成」小笠原道雄編『教育哲学の課題「教育の知とは何か」—啓蒙・革新・実践—』, 福村出版株式会社, 2015年, 203-220頁 また本研究が対象とするガダマーのビルドゥングそれ自体も極めて外国語に翻訳しづらいという性格を持っているという事実もある。ガダマーの用いるビルドゥングの概念には、『真理と方法』の邦訳で選択されている「教養」という意味に加え、一般的にそれらと並びよく用いられる「陶冶」ないし「人間形成」という意味も含まれているように思われる。このガダマーのビルドゥング概念の外国語への移し替えの難しさをリチャード・ローティは指摘している。Richard Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton/Newsersy, 1979, p. 360.

²⁾ それぞれ以下のものとなっている。Ernst Lichtenstein, Art. Bildung, in; Joachim Ritter u.a. (Hrsg.), *Historischeswörterbuch der Philosophie*, Bd. I, Sp. 921-938, Stuttgart, 1971.

Rudolf Vierhaus, Art. Bildung, in; Otto Brunner/Werner Conze/Reinhart Kosellek. (Hrsg.), *Geschichtliche Grundbegriffe. Lexion zur politischsozialen Sprache in Deutschland*, Bd. I, S. 508-551, Stuttgart, 1972. なお、本論文の Bildung 概念の変遷についての記述はこの二書に負うところが多いことを明記しておく。

³⁾ Lichtenstein, Ebd, Sp. 921. Vierhaus, Ebd, S. 508.

⁴⁾ Lichtenstein, Ebd.

⁵⁾ この点については以下の論文を参照。濱田真「近代ドイツにおける Bildung 概念の変容—啓蒙主義から新人文主義への移行期を中心として」『言語文化論集』51, 69-94頁, 1999年

⁶⁾ Gadamer, GW1, S. 15.

⁷⁾ Lichtenstein, a.a.O., Sp. 925.

- ⁸⁾ Vgl. Vierhaus, a.a.O., S. 511f.
- ⁹⁾ Lichtenstein, Ebd.
- ¹⁰⁾ Vierhaus, a.a.O., S. 526f.
- ¹¹⁾ Lichtenstein, Ebd.
- ¹²⁾ GW1, S. 18.
- ¹³⁾ Ebd, S. 17.
- ¹⁴⁾ Vgl. Andreas Dörpinghaus/Andreas Poentisch/Lothar Wigger, *Einführung in die Theorie der Bildung*, 3. Auflage, Darmstadt, 2008, S10.
- ¹⁵⁾ Heinz Elmer Tenorth, Bildung: Thematisierung und Bedeutung in der Erziehungswissenschaft. In: *Zeitschrift für Pädagogik* 43, 1997, S. 969-984.
- ¹⁶⁾ Tenorth, Ebd, S. 976-977.
- ¹⁷⁾ テーノルトのこの論文を取り上げたものとして鳥光の次の論文が挙げられる。鳥光美緒子「人間形成—教育科学の基礎概念としての Bildung」『教育思想史で読む現代教育』, 森田尚人・森田伸子編, 勁草書房, 2013 年, 156 頁-175 頁
本論文のなかで鳥光はこの三類型を取り上げ, 独立したものであるかのよう
に論じているが, 筆者の考えは異なる。
- ¹⁸⁾ Tenorth, a.a.O., S. 977.
- ¹⁹⁾ 鳥光, 前掲論文
- ²⁰⁾ Tenorth, a.a.O., S. 980-981.
- ²¹⁾ 鳥光, 前掲論文, 166 頁以下参照
- ²²⁾ 山名淳・藤井佳世・L ヴィガー編『人間形成と承認—教育哲学の新たな展開』, 北大路書房, 2014 年
- ²³⁾ 前掲書, 47 頁以下参照
- ²⁴⁾ たとえばハンス・クリストフ＝カラーといった論者はヘーゲルではなくフンボルトを参照項としている。前掲書, 31 頁以下参照
- ²⁵⁾ Heinrich Rombach, Der Kampf der Richtungen in der Wissenschaft. Eine wissenschaftstheoretische Auseinandersetzung, In; *Zeitschrift für Pädagogik*, 1967. Wolfgang Brezinka, Über den Wissenschaftsbegriff der Erziehungswissenschaft und Einwänder der weltanschaulichen Pädagogik. Eine Antwort an Heinrich Rombach, In; *Zeitschrift für Pädagogik*, 1967.
- ²⁶⁾ Brezinka, Ebd, S. 143.
- ²⁷⁾ Reinhart Koselleck, *Begriffsgeschichten: Studien zur Semantik und Pragmatik der politischen und sozialen Sprache*, Frankfurt am Main, 2006, S. 114.
- ²⁸⁾ Vgl. Thomas Gutschker, *Aristotelische Diskurse. Aristoteles in der politischen Philosophie des 20. Jahrhundert*, Stuttgart/Weimar, 2002, S. 200f. Donattella

Di Cesare, *Gadamer: Ein philosophisches Poträt*, Tübingen, 2009, S. 141.

- ²⁹⁾ Manfred Riedel (Hrsg.), *Rehabilitierung der praktischen Philosophie. Bd. I: Geschichte, Problem, Aufgaben*, Freiburg, 1972; *Rehabilitierung der praktischen Philosophie. Bd. II: Rezeption, Argumentation, Diskussion*, Freiburg 1974.
- ³⁰⁾ Martina Plümacher, *Philosophie nach 1945 in der Bundesrepublik Deutschland*, Reinbek bei Hamburg, 1996, S. 240–241.
- ³¹⁾ Plümacher, Ebd.
- ³²⁾ Ebd.
- ³³⁾ Helmut Fahrenbach, Ein programmatischer Aufriß der Problemlage und systematischen Ansatzmöglichkeiten praktischer Philosophie, in; Riedel, a. a.O., S. 16.
- ³⁴⁾ Plümacher, a.a.O, S. 100.
- ³⁵⁾ Ebd, S. 113.
- ³⁶⁾ Ebd, S. 114.
- ³⁷⁾ Joachim Ritter, Die Aufgabe der Geisteswissenschaften in der modernen Gesellschaft, S. 125. In; ders., *Subjektivität*, Frankfurt am Main, 1974, S. 105–140.
- ³⁸⁾ もっともこの捉え方は可能であるかもしれない。三島憲一はリッターの当該論文に言及しつつ、ハーバーマスの批判を援用しながらリッターの立場を「リッター的なアポロギーの文化主義的狭隘さ」と痛烈に皮肉っている。三島憲一『歴史意識の断層』, 岩波書店, 91 頁。ただ、リッターが「いわゆる」フンボルト的なビルドゥングを基盤に論を進めていることから、この指摘は必ずしも妥当ではないだろうというのが筆者の見解である。
- ³⁹⁾ 本論註 28 を参照。
- ⁴⁰⁾ Vgl. GW1. S. 1f.
- ⁴¹⁾ Ebd.
- ⁴²⁾ Ebd, S. 15ff.
- ⁴³⁾ Ebd, S. 17.
- ⁴⁴⁾ Ebd.
- ⁴⁵⁾ Ebd, S. 19.
- ⁴⁶⁾ Ebd, S. 20.
- ⁴⁷⁾ Ebd, S. 22.
- ⁴⁸⁾ Vgl. Casten Dutt (Hrsg.), *Hermeneutik, Ästhetik, praktische Philosophie: Hans-Georg Gadamer im Gespräch*, 3. Auflage, Heiderberg, 2000, S. 31f.

⁴⁹⁾ GW1, S. 356.

⁵⁰⁾ Ebd, S. 359.

⁵¹⁾ Ebd.

⁵²⁾ Ebd, S. 361.

⁵³⁾ Ebd, S. 363. この「有限性」というタームはガダマーの「哲学的解釈学」の鍵概念の一つであり、論者によってはガダマーの哲学的解釈学を「有限性の解釈学」と呼ぶ。Vgl. Jean Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik*, Darmstadt, 1991. S. 148. Cesare, a.a.O., S. 227ff.

⁵⁴⁾ GW2, S. 441.

⁵⁵⁾ 加藤哲理『ハンス＝ゲオルグ・ガダマーの政治哲学—解釈学的政治理論の地平—』, 創文社, 2012年, 103頁以下参照

⁵⁶⁾ Kosellek, a.a.O., S. 147.